

とっとう通信

2021年3月17日発行

216号

「とっとう通信」は
略して「とっつう」。
いつも読んでいただき
ありがとうございます。

こんにちは！平川です。今月で216号を迎え、書き始めて18年が経ちました。文章を書くのが苦手で、長くは続かないと思っていただけに、私が一番驚いています。いつもお読みいただき、ありがとうございます。これからどうぞ宜しくお願いいたします。

さて今回は映画をご紹介します。2013年アメリカ映画、トム・ハンクス主演の「キャプテン・フィリップス」です。これは2009年に実際に起こった海賊によるソマリア海域



人質事件を題材にした映画です。それにしても、トム・ハンクスは海での災難によくあいますね。

では、今月もはりきっていきましょう！

(あらすじ) フィリップス(トム・ハンクス)は、大型船アラバマ号の船長です。オマーンからケニアへ援助物資を運搬していましたが、ところがアフリカのソマリア沖で武装した海賊に襲われます。武器を持たない乗組員たちは、放水や発煙筒で追い払おうとしますが、ついに乗船され、シージャックされます。すぐさま船

長は乗組員らの身の安全を考え、機関室へ隠れさせます。しかし海賊との攻防のち、乗組員を自由にしてもらう代わりに、船長は人質となり連れ去られます。この事態を重く見たアメリカ海軍は、特殊部隊ネイビーシールズを出動させ、船長の救出に向かいます。

(感想) 「え、今どき海賊なんているの？」はい、沢山います。日本のタンカーも襲われたことがあります。

海賊というと「ワンピース」とか「パイレーツ・オブ・カリビアン」といった、大きな船にドクロマークの旗をイメージされる方も多いと思います。しかし今は違います。小さな漁船で襲ってきます。銃やロケットランチャーで武装し、

ハイクテクノロジーを使います。それに対してコンテナ船側はというと、何も武器を所持していないのでは丸腰です。とはいえ四人の海賊に何万トンもあるコンテナ船が、いとも簡単に乗っ取られたことには、本当に驚きました。海賊の狙いは、船に積



んでいる品物ではありません。身代金です。船員を人質に取り身代金を要求します。映画では、彼らの暴力的で狂気じみた雰囲気は、とても恐ろしく感じました。しかし話が進むにつれ、その北背景にある「彼らはなぜ海賊になったのか？」という経緯が見えてくると、次第に同情の念へと変化していききました。視聴後に、色々調べてみました。ソマリア沖の海賊たちは、もともと、漁業を営む漁師でした。

日本も漁船や漁港の整備に援助をして、マグロを輸入していましたが、99年に内戦が勃発、政権が崩壊したため、魚の輸出が困難となりました。無政府状態となったため、漁場の監視が出来なくなり、「こそこそ」ばかりに諸外国の大型船がソマリア沖に詰めかけ、魚を根こそぎ乱獲します。さらに欧米企業が産業廃棄物、核廃棄物を海へ投棄するようになり、その結果、漁師たちは、外国船から自分たちの大切な漁場を守るため、やむなく銃を持つようになり、一部が海賊になりました。その一部が海賊になり、たという経緯です。映画で印象に残ったシーンです。船長が海



賊に言います。「漁師が人を誘拐しなくても他に道はあるだろう」と。すると「アメリカならな」と一言。裕福なお前たちには分からない。と言いたげです。また海賊の一人が「去年はギリシャの船から600万ドルせしめた」と自慢するシーンがあります。しかしその服装はボロボロで、足はサングダルです。600万ドルを手にした身なりには見えません。海賊も組織化され、お金はすべてボスが吸い上げ、末端は貧しいままなのです。もちろん海賊行為は許される事ではありませんが、彼らは先進国の被害者なのです。海賊にならざるを得ませんでした。今でも漁師という仕事に誇りを持っていると言います。仲間の一人はまだ10代の少年でした。監督のポール氏が言っています。「最も危険なことば、生きる目的のない若者に銃を与えることだ」と。大団が犯した罪の大きさを思うと辛い映画ですが、文句なしの傑作です。メールに予告編のリンクを張っておきます。ぜひご覧ください。

発行／有限会社アサム
〒819-1127 福岡県糸島市有田中央 2-14-36
Tel: 092-321-4001 Fax: 092-321-4002
・専門学校&スクールサーチ: <http://www.asamnet.jp/>
・ブログ: <https://itorinri.com/>